



【写真説明】1. 耕作放棄を解消した田んぼで開いた自然栽培米ワークショップ／2. つなぎ FARM オーガニック映画祭を自ら企画／3. 大工の協力で移動販売車を製作／4. 無肥料・無農薬の米を土鍋で炊く。口の中にやさしい味わいが広がる／5. 離乳食「あんしんまんま」。おかゆや野菜をペーストにして食べやすくした

移住を希望したそうです。つなぎ FARM 推進業務担当として協力隊に採用され、地元住民から借りた耕作放棄地を活用した体験イベントや自らも稲作などを実践。ことしの作付面積は昨年の約2倍、40アまで拡大しました。

子どもには安心・安全なものを食べさせたい

「安全・安心な食はさらに重要になり、価値も上がっていくと思う。しかし、いくら高い理想を掲げても、生活し

ていけないと農業は続かない」。そう話すのは農業の厳しさを身をもって感じてきたから。「無農薬だから病気が広がってしまうこともある。自然はこわい」。農業は経験が物を言うことも多く、頭を悩ませた日もあったそう。しかし、できた野菜や米はすごくおいしく、喜びを感じることも増えてきました。

所得向上の取り組みの一つに、移動販売車「つなぎ FARM 号」を製作。食への関心が高い人が集まる県内外の

あかさたなのうえん「あんしんまんま」



小野さんが安全・安心なものを子どもに食べさせたい、と開発した安心の離乳食シリーズ。米や野菜など全て津奈木産自然栽培のもの。レトルトパックに入っているので、使いやすく便利です。

あかさたなのうえん
☎090-6106-2606

オーガニック(有機栽培)マーケットやマルシェに積極的に出店し、PRと販路拡大につなげてきました。

「子育てを経験してきたからこそ、子どもには安全・安心なものを食べさせたい」と試行錯誤する中で目をつけたのは、そんな親心を満たす、町自然栽培品を使った離乳食「あんしんまんま」。新型コロナウイルスで行き場を失った野菜と豪雨で収量が減った米で作られています。「安心な『まんま(ご飯)』自然栽培の米、野菜、中尾水源の湧き水しか使わない素材その『まんま』、『ママ』が安心という意味を込めています」。

今後は地元農家と連携し、野菜の種類を増やす計画。小野さんは「協力隊の任期は来年2月までですが、定住に向けて農業と販売を軌道に乗せたい」と意欲を見せています。



豪雨災害時にSNSで支援を呼びかけ。多くの支援物資が集まった

「自然栽培に惹かれ、ここでやってみよう」と決意しました。本町で平成31年から地域おこし協力隊として活動中の小野

孝弘さん(内野)。熊本には平成28年の地震後にボランティアで訪れました。

みかん農家のアルバイトをしながら約1年半滞在していたとき、農業に興味をわき始めたと言います。「食の安全

と環境のことを考えると自然栽培が良いという結論になりました。しかし、「無肥料・無農薬の自然栽培をしたい」と言うと、『農業を使わないと周りの畑に虫や病気がうつる』という理由で土地を貸し

てもらえない。自然栽培を一人で始めるのはかなりハードルが高かった」と途方に暮れていた小野さん。そのときに津奈木町が、町をあげて長期的に持続可能な農業に取り組んでいることを知り、すぐに

目指すのは、稼げる自然栽培農家

自然栽培での就農を目指し、平成31年に宮城県から移住した地域おこし協力隊の小野孝弘さん(内野)。津奈木町だから実現できたこと、つなぎ FARM の取り組み、そして今後の展望をうかがいました。



地域おこし協力隊
小野 孝弘 さん(内野)